

高棧敷

泉鏡花作

—

「もし、其處は突當りではございません、抜けられますよ。」

「參られますか。」

と鳥打を被つた懐手、別に用も無さうな、ぶら／＼歩行で來た青年が振返つた。

春もたけなはと云ふ、一土曜日の日暮前の事で。——此は近頃、強力松の裏あたりへ越した、何處か私立で學校で一吋何か教へて居る、木崎時松と云ふのが、當なしに大通りを西へ入つて、谷町邊の坂下の窪地をぶらついて居たのである。

其處等、屋敷町に、處まだ取拂ひを濟まさない、卵塔場の交つたのを抜けて、がつくりと坂へ沈んだ、下り口は、急にわや／＼と賑しく、兩側には、下の積の荷物を釘を放して掀開けた形した、其でも店が

續いて、豆腐屋の喇叭も鳴れば、羅宇屋の湯煙もむら／＼と立つ。小兒も駆廻れば犬も走る。

が、少し行くと、最うこはれ／＼の長屋ばかり。夕春 日の縁臺へ缺けた竈をがったりと据ゑたのが見える、と隣の軒下には、溝へ渡して附木細工の板流しが張出してある。手桶も、飯櫃もごた／＼大掃除の時のやうに、穴だらけの戸障子から遮るものもないくらゐ。露骨に世帯が食出して、其のまゝべた／＼と正札を貼れば、すぐにながら／＼の市が榮えよう……

其も道理か、ー 何も各自が嗜このんで、往來端へ勝手を曝したわけではない。此の片側は一面に裏が見上げるはどな岨で、早や下萌の濃い煙、一面の草の叢、蛇の蜒蜿つた跡らしい茶色の路が空さまに見え隠れで、狗がのそ／＼と戸惑をしたやうに歩行く。見ても慄然とするばかり、じめ／＼と濕けて居て、處々に樹の繁つた、此の岨に押被せられて、何時が世にも、長屋々々、其の裏口には日の當る瀬はあるまい。

ために家中、戸外へ、戸外へ、と背後から小突かれて、主人は愚か、女房、小兒、其の日稼ぎに追廻はされて、内に端然として居るのなどは、見たくてもない境遇。

屋の棟へ、どろ／＼と岨の雪崩れた處には、蜜柑の皮、瀬戸物の欠片と一緒に成つて、上の墓地からであらう、卒都婆の挫折れたの、石碑の碎けたのが、赤土まじりに、草の根に落掛つて、しよぼ／＼雨の陰氣さだと、晝も蒼白く燃えさうである。

まだ凄じいのは、流に青苔の生えた總井戸より、高い處に、岨の腹へ打ツつけた埃溜で。いや、もう、雑多な芥が、そろ／＼ぐしや／＼して汚い瀧のやうに流れ懸る。

即效散、一粒丸など、古めかしい廣告が、破葛籠に下貼した體に、上へ、上へ、と路地、抜裏の透いた處を貼塞いで、此の膏藥を潜らない新らしい風も通はず。

忬る中にも、勲八等在郷軍人の門札は、頼母しや、
町内鎮座の軍神である。

尤も件の名前に並べて、

(ぢやうぶな草鞋あり。)

と紙切に貼出したは彦左衛門殿。

軒の、其の下に、襪褌半纏を着た、鐵漿斑な中婆
さんと、襷掛けの胸を開けて、大な乳をむつと押附
けながら嬰兒を抱いた、圓鬚の手柄の汚れたの
と、通懸りの一寸見によくは覚えぬが、
最う一人、其も女で、三人。

悟つたやうに、晩方の青黒い崖を見て、薄茫乎と
立つて居たのが、背後から呼留めて、
うした聲を掛けたのである。

いま洪水がひいた跡と云ふではなし、路の眞中に、
糠味噌桶、炭取が流留まつたわけではなけれど、露
出な、流元、竈の前、何か餘所の臺所でも抜けて行
くやうで、斜に渡した溝板を幾つも飛び、とば
ノ、とした足つきで、

「御免………」と、
肚の中でつい言ひながら
辿つた處。

二

前途にびたりと、可なり大構の門がある。其から
左右へ黒板塀を押し廻はした。其の塀の角と崖の腹
が、犇とつばまつて薬研の如く、中窪みに向うが行

詰まりに成つて、一ツ身震ひをして、むつくと起つて、ぬいと伸びを打つた状に、樹の根の土を擡げて居るのが網を張つたやうに見える。下を潜つて、崖の腰を、ちよろ／＼と水が流れる。

樹の下なれば、早や暗い。

透かして、其處は行止りだ、と思つて引退した其の途端であつた。

「難有う、」

「其の堀際を、ちよろ／＼水について構はずおいでなさいまし。」

と鐵漿斑な笑顔で言つた。

「しかし、餘所の構内ぢやないのですか。」

「否、貴下、」と、一寸抜衣紋。

「何方へ行らつしやいますの、」・・・と小兒を胸に揺上げるやうにしながら、少いのが下駄を引摺つて少し出た。

「何處と云つて、・・・ぶら／＼運動に歩きます。急ぎはしません、引返したつて可んです

よ。」

時ときが言いふのを聞きき／＼、二ふたり人で顔かほを見て、兩方りやうほうが瞬またき交かはした。

「え？」

「えい？」

と頷うなづき合あふ。

「でも、行ゆかれますかね。」

此これには答こたへないで、

「大丈夫だいぢやうぶだね、先生あなたがた方がたなもの、何なに、お前まへ、」と鐵かね漿じやうが若わかいのと言いった。

「然さうねえ。」と納なつとく得とくしたらしく、白しら齒はが頷うなづいて、も一てツ手てを廻まはして、小兒こどもの背せを抱だき添そへる。

「行いらつしやいましよ……路みちなんでさあね、

ほゝゝほゝ。」

と又また斑まだら。何どうやら其それが意い地ぢの惡わるさうな顔かほ色つきに見みえ
た。

且かつ其その笑わらひ方かたが、妙めうに嘲あざける如ごとく聞きえたので、フ
ト氣きに成なつて猶た豫めつたのが、妙めうに引ひ返かへしては蔑さげまれ
るやうに思おもつて、聊いさか憤ふん然ぜんとした氣き構まへへ。

何なにを！ で、づか／＼。

「氣をつけておいでなさいましよ、路が悪うござ
いますわ。」

「難有う、」

と振り返つて鳥打に手を掛けたなり、其の少い優し
らしいのが、小兒を横に抱直して、襟を合はせたの
を見たが、其のまゝ堀について崖下へづつと入つた。

上は樹の間に、草を覗いて、墓石が薄のほうけた
やうに、すく／＼ある、足許は最う暗い。溝の色は
眞黒で、上澄のした水が、ちら／＼と樹の根を映し
て流るゝともなく、たゞ揺れる。・・・其
のへりを、畝つて穴のやうな路は、漸ツと人一人、
崖と板堀とに、其も袂が擦れ／＼で。

堀の大きな破目から、心するともなしに中を覗くと、
五輪が見える、手水鉢が見える。向うに、干からび
た藤棚があつて、水は濁つたが、歴とした池がある。
境内の存外大い、此も寺院で、其の池の面に、大空
の雲がかゝつた。

少し行く、と向うが又突當りに成りさうな、崖が

ぐるり取巻いた、……よく言ふたとへながら
擂鉢の底のやうな處らしい。

直きに、其も抜けられさう。で、別に仔細はない。
女同士が囁いたのも、扱は、此方が念を入れたゝめ
に、一寸答へに淀んだので、實は矢張り表向きの抜
路ではなく、便宜のために、居まはりのものばかり
覺えた抜裏などであらうも知れぬ。

氣安く、又懐手のぶらりと成つて、板塀の破目、
透穴から、五ツばかり寺の池を數へて行つたが、一
本、樹の大なのを向うへ抜けると、岨が引包んだ、
其の突當りのやうな上の、づゝと立樹の梢を離れた、
遙な空に、上町の家の二階があつて、欄干もともに
目に附いた。

けれども其は二階ではなかつた。

が、三階四階ぐらゐに高い……崖の頂邊か
ら、棧橋の如く、宙へ釣つた平家なのである。

勾配も随分峻しい、一なだれの草の中から、足代の如く煤びた柱を、すく／＼と組んで築上げて、崖からはまるで縁の離れた中途で、其の欄干づきの座敷を、樹の上に支へたが、眞仰向きに成つて見上げるばかり。で、恰も橋の杭、また芝居の舞臺の奈落とか云ふものめく。

芝居と云ふにぞ、棧敷を一間、空中に張出した形である。襖の模様は奥深く、最う夜の色も迫つたらう、遠く且つ暗くて見えぬ。

障子は一枚もなく、明放しで、廻り縁の總欄干。

時がイんだ處からは、其の横手が見えて、一方は壁の、其の色も眞暗で、足代めく橋柱は固より、透いて見える舟底の如き天井も、件の縁も、一體に煤け古びて、欄干の小間も其方此方ばら／＼に抜けて居る。

背後正面は、此なる寺の屋根さへ、下界一片の瓦

にして、四谷の半分、赤坂かけて、何處まで見通しか計り知られぬ。

からりと廣いから、氣の所為もあらうけれども、なか／＼八疊六疊と云ふ座敷でない、十五疊二十疊、まだあらうとも思はれた。

下から見えるのは、唯其の一室ばかりであつた。いづれ上町通りの門口には、――京が見える、大阪が見える、と斜めに貸家札を貼つて、雑作がはりに、家相傳の望遠鏡を賣りでもしよう。

が、土蜘蛛の脊と蝦蟇の頭を礎にしたやうな、床下の柱を見ても、十年來の貸家が知れる。

ときは目を二つて舌を巻いた。が、ぶらりと歩いて、其の棧敷の正面へ廻ると、やあ／＼、空屋處か。

丁度其の間に、二抱へもありさうな、何の樹か、春早く葉の茂つたのが、岨の裾、やがて、溝越しに行くものゝ手の届きさうな處に、づしりとあつて、すツくと高い。

此の樹の蔓つた枝と、向ひ合つた廻り縁の角の柱
と、さしわたしに遮られて、横手からは見えなかつ
ただらう。

其の縁の曲角に、夕詠めと云ふ、つれ／＼姿で、
正面の欄干に凭懸つた、繪の抜出したらしい婦が居
た。

一本、西、夕日、宵月の景色を視める風情ではな
い。

此方へ、雪のやうな襟脚と、すらりとした艶やか
な鬢を向けた、すねた柳の坐りやう。風にも堪へま
い、細りした瀧縞の、お召縮緬であらう、黒繻子の
襟と其の長い襟脚をすつきりと水際立てたは、濃い
浅葱、あとで心着くと、遠目なのに、――其の
半襟の無地だつたのも不思議なほど判然見えた。

髪も浅葱の切を捲いて、三ツ輪と云ふ、婀娜に媚
かしい結方して、紺地に白で獨鈷の入つた、博多ら
しい丸帯を、浅葱絞りの背負上げはづれに、がツク
りと弛く結んだ。結目は小間の横木に隠れたが、上

についた袖が颯と雲に沈んだやうに空へ掛つて、う
しろへ反らして肱をついた、八ツ口深き緋縮緬は、
居坐居の裾にも散つて、黄昏かゝる岨の上も、ほん
のり明るく、薄紫の霞を彩る。

時は茫然とした。

空なる婦も、暫時、身動きもしないで、熟として、
部屋の向の、突當りの黒ずんだ廣い壁を見て居たの
である。

ちらりと白い爪尖で、紅の襖を、崩るゝ如く、横
坐りに、もう一息、欄干に撓ふばかり、たをやかな
其の脊を凭たす、と思はず、青年が、板塀に殆ど魂
の抜けた身體を寄掛からせた時であつた。

横手の縁側を前後に、二人、二三尺間を置いて、
又是は……羽先の黒い白鳩が、ひら／＼と木
隠れに梢を潜るやうに來たのは、對の白衣に墨染の
腰法衣を裾短く着た、剃たてらしい、頭のを／＼
と藍色して眞圓な、色の白い、揃つて目鼻立の愛く
るしい、いづれも年紀は十三四。

四

お小僧らしい其の二人が、摺足かと思ふ恭しい運びで廊下を渡つて・・・今正面へ来たのを見ると、二人とも紙を折つて、ぴたりと口蓋を掛けて居た。

で、いづれ飲料か何ぞであらう、両方が、齊しく小さな器を手に捧げて居て、唯見るとやがて、婦の前へ順に竝べて、つゝと腰衣を黒く、姿を白く、板を、這つて一様に跪いた。

其の時、何か差心得たものであらう、二人とも、ちよろ／＼と立つて、欄干へ出て、手を支いて、半身中空へ乗出すやうな形で此方を瞰下ろす。白衣の下に薄紅の颯と透過つて見えたのは、婦の間近に成つたゝめ、其の長襦袢が照映えて、二人の膚に染みたやうであつたが、よく見ると羅に襲ねたので、お小僧達は、目許口許、見紛ふ方なき女の童なのである。

不審さに、渠は水を浴びたやうにひやりとして、背後を見ると、凭懸った板塀の節穴に、背後なる寺院の其の境内の池が、黄昏の色に染み出したやうに急に大さも廣さも増して、ふわりと浮いて、ひた／＼と水が背中を浸しさうに見えて、而して波を立て、緋鯉がすら／＼と行く。

其の影も、燐火のやうに凄かった。

頭の上でぐわう／＼と沈んだ陰氣な音がする。

「樵夫だ。」

と、聲を出して呟いた。

婦に見惚れて、恍惚と成つて忘れて居たらう、崖に近い、其の大樹の末高い處で、鋸を使ふ氣勢である。

枝さし繁りたれば、葉隠れて烏の踞つた影も見えぬが、ぐわう／＼ぐわう／＼として幹の骨髓に響く。と心着けば、向うの欄干の角の柱に生えた、やどり木の枝のやうな梢の一處、特に緑を籠めて暗い中に、風のない日だつたが、ざわ／＼とそよいで、かつらを捲く體に、木の葉の渦巻くのがあり／＼と認め

められる。 . . .

「これは。」

羽織の襟、帯を掛けて、袖の皺にもばら／＼と、少しづつ、少しづつ、霜が下りたやうに木屑が落溜つて居たのである。且つ其の色が生々として朱い。時は、慌しく、總身に震揺をくれて、袂をはた／＼と拂ひながら、樹の下を摺抜けた。

雨も鎗も厭はぬが、暮に及んで、恚う鋸を使ふ處では、見込んだ仕事、半途で止すまい。一息と云ふ仕上げで、今にも梁のやうな大枝が、地響を打つて落つるは一定。

「疾く出よう、何だか可訝い。」

其でも、餘りの事の、媚かしく美しいのに、骨筋もなへるばかり、蕩々と成つて、彷徨ひながら、突當りへついで曲ると、思の外谷は浅い。向うは低い處、又墓場で、上に、町へ出るだら／＼坂の、ぼき／＼と埒を結つたのが橋のやうに斜めに渡つて、寂寞したが人家も見える。

此處を取廻はした岨は、裙が其の墓場で盡きる。
谷の出口が懷を廣く、箕の形に開いて居た。

墓場と岨の裙を境の處に、潰した井戸のあとと思ふばかりの水溜があつて、其が浸むか、一面にじと／＼と、底光がするかと土が濡れた。上には四方から樹が被さる。

渠が傳つて來た小流は、幽ながら、下から湧くか、岨を絞つて滴るか、此の水溜の、浸出す水の捌口らしい。

其處に朦朧として一人。大川端に暮残つた状して、類被した漢が居た。手足は動くが、潮に揺れる杭を打つた形である。

半股引の裾端折りした脚に近く、水溜のへりに、やがて腰の上まで届く、網を蓋した大形の古い畚。

繪にした狸の八疊敷ばかりなのを引着けて、竹棹を横へたのを、釣の歸途が洗足するか、と思ふと、違ふ。

手にしたのは一本の熊手。柄短かに片手に取つた、片脇に手頃な一個の箕を抱いた。

箕をひたと草に着けて、腰の骨で附着けながら、
件の熊手で、岨の腹を逆さ扱きに、ずら／＼と搔落
して、其の箕でうけて、溜ると、熊手をさし置いて、
両手で取つて俯向けにして、下の畚の口へあけ落す
時、さつと云ふ 滅入つた、沈んだ、
冥途を吹く風のやうな音がして、心持冷々として生
腥い。

落葉搔くの、畚は可怪。

一寸見る間に、同じ事を三度した。

其差置く時、熊手は岨の草へしよぼりと沈んだ形
に成る、 すつと柄を取つて、ちよつ
かいの手つきで搔く。ト最う箕が小脇に引着けられ
る。かさ／＼と引落す、直ぐに溜るか、畚の口へ、
ざあ、とあける。トさつと云ふ可厭な音。

仕事を急ぐのではない。向返るのも大儀らしく、
だらけて、もそりと行るが、馴れ切つたものらしい。
何時も同一呼吸で、器械の如くに體が動く
・ ・ 恰も緩かな水車に仕掛けた機關の案山子のや
うな。

山田、小田、目も遙かな、里遠い山の峽に、影唯
一つ秋の暮れ行く思がする。

「親仁さん。」

と背後に寄つて、渠は訊ねた。……言を

交へて、あはよくば聞きたい事があつたのである

「この界隈のものと見た。」

「お精が出ますね。」

「うゝ。」

と頬被りの深い裏に、惰けた、面倒くさゝうな聲を出したばかり。

熊手を取つて、さら／＼と草を扱く。

「何をして居なさるんだね。」

「掘出すだよ。」

と又一掻。

近間で聞くと、是さへ可忌はしい、鱗に觸るやうな草摺れの齒の音なり。

「掘るんですか、何をね。」

「毎日の食を求漁るだよ。」

知れた事を、と投げた言語。

「食べるものなんですか。」

「賣りもするだ。」

「松露ぢやなし、一體何です。」

「問はんが可え、聞いたら魂消るぞ。」

と箕にうけるのが、ぞろ／＼と鳴る。

時は、そんな事はつけたりで、構はぬのである。

「然う言はれる、と尚聞きたいね、親仁さん。」

「何だてえ。」

「其處の岨の上にある」

と言ふことも身を轉じて、指さうとしたが、美女

の姿は木隠れに成つて居た。

虹の消えたやうな心地がしながら、

「あの、家は、 あれは何です。」

「たゞで貸す、名代の空屋だ、誰も住まねえ。」

「違ふよ、人が住んで居ます。」

「や、」

と云ふと、箕をさつとあけた處、 ぐるり

と向直つて、屹と見た、其の眼の凄さ。

何心なく立つたのが、思はずじり／＼と後に退つ

た。

「主あ！ 見たか？」

聲が出なんだ。

「・・・・・・・・」

「む、其を見たら、是も見せう。」

と水溜に搔踞ひ状、握拳で丁と壓へて、畚を、ぐら／＼と揺ると思へ。

網を分けて、むら／＼と煙のやうにのたくつたは、幾百條とも數知れぬ、細い蛇の鎌首であつた。

呼吸がつまつて、岨へ取つて投げられた如くに突當ると、弓形に身體と、ともに反曲つて、舊來た塀際へ駆出した。

徑を塞いで、眞赤な雲。恰も瀧の如くにかゝるは木屑で。早鐘を撞く耳の底を抉つて、ぐわう／＼ぐわう／＼と云ふ。

木の葉は空にぐる／＼と大渦に渦卷いた。

「わつ、」

と叫ぶと、頭から目口へ浴びつゝ、めくら突きに、

其谷そのたにの窪くぼみを飛出とびだす。と、木樵きこりが落ちたか、枝えだが下り
たか、背後うしろに凄じすさまい音おとがした。

今いまは癒いえたが、其その後のに、しばらく目めを悩なやんだ。其そ
のあと日ひを經へて消きえたが、木屑きくづを浴あびた羽織はおりの其そ
處こ此處こゝ、宛然さながら血ちに染しみて居ゐたのであつた。

【完】